

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所長 渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

名古屋女子大学創立100年の節目に当たる平成27年度は前期が終了し、後期開始とともに文学部の汐路校地への移転が完了しました。総合科学研究所も校地の統合による新たな出発という形で、充実した活動を展開したいと考えています。

現在、総合科学研究所機関研究として「大学における効果的な授業法の研究7～学生が主体的に学修する力を身につけるための教育方法の開発～」が展開されています。平成26年12月の文部科学省中央教育審議会の答申には、大学教育の質的転換が求められており、学生の「主体性・多様性・協働性」を育成する観点で「学生が何を身につけたいか」を重視する姿勢が重要だと提唱されています。本機関研究における「主体的学び」の観点は正に今必要な研究姿勢と言えるでしょう。

さて、昨年度、本研究所主催大学講演会において、文部科学省の諮問委員も務められていたNPO法人「NEW VERY」代表の山本繁氏に「学生募集につながるFD～これからの学生募集戦略～」と題して御講演いただきました。講演内容は「総合科学研究第9号」の大学講演会報告の頁にパワーポイント資料が掲載されています。FDを通じて各教員が教育力を向上させ、その成果を学生に伝える

ことが学生募集にも繋がるというお話は新鮮であるとともに、授業改善の、教育そのものとは異なる側面での重要性も垣間見えたように思われました。

現在、同法人大学プロフェッショナル部門担当の方に大学授業法の研究会に参加していただいています。学外からの視点でアドバイスをいただき、大きな複合的成果を生み出す方を模索し実践しようとしています。このような外部組織と協働して研究を進める試みは本研究所としては初めてですが、多様な研究領域を総合的に捉えようという総研ならではの視点ではないかと思っています。大学内部からでは見えない新鮮な視点を導入することにより、学生の学びの現実の姿を明確にした上で、ラーニングスタイルとティーチングスタイルをマッチさせることにより、教員がより授業力を向上させ、学生の主体的な学びの姿勢を引き出す具体的方法論を明らかにできるのではないかと期待しています。

一方、今年度は地域貢献事業としての瑞穂児童館との連携した活動が活発化しています。今年度当初に募集した講座やクリスマスイベントには、予定数よりかなり多くの先生方が応募していただきました。講座数の調整が大変だと思われましたが、児童館側の御配慮もあり、ほぼ全ての希望講座・イベントが実施できる運びとなりました。総研の地域貢献事業が、参画される先生方にとり、ご自身の教育や研究においても意義深い位置付けになるとともに、大学としての地域貢献として、今まで以上に質量共に充実していくものと期待されます。

平成26年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂保健所「若がえり教室 きらきらコース」を終えて

名古屋市瑞穂保健所 保健師 平生祐一郎

瑞穂保健所では、名古屋女子大学と共催で高齢者の認知症・うつ予防を目的にした、「若がえり教室（きらきらコース）」を開催しています。この教室は、名古屋女子大学の文学部児童教育学科や短期大学部生活学科の教員と学生、春光会のご協力を得て、6年目を迎えることができました。

平成26年10月～平成27年2月の6日間コースで、60歳代から80歳代の男性1名、女性33名が参加されました。プログラムは、「楽器を使った音楽」、「染色ハンカチの制作」、「羊毛フェルトでカラフルコースターの制作」、「懐かしい童謡や唱歌」、「ヒノキを使った木工作品」など。参加者の方々は、普段入る機会がない大学のキャンパスで学べ、キラキラされていました。また、「気分が若

返った。」「たくさんの仲間と出会えた。」など嬉しい声もいただいています。さらに、教室終了後も気の合う仲間と集まり、様々なことに挑戦されている方もたくさんいらっしゃいます。

近年、認知症高齢者数は年々増加しており、認知症の医療・介護が大きな社会問題になっています。厚生労働省は、平成24年時点で認知症高齢者数が全国に約462万人（約7人に1人）、平成37年には約700万人（約5人に1人）になると推定しています。今後、認知症の予防・早期発見など対策がますます大切になってきます。認知症研究では、アクティブな活動や新たなチャレンジ、人との交流が認知症予防に重要といわれています。今後も大学と連携して高齢者の方の健康づくりを支援していければと思っています。



リズムにあわせて！



カラフルコースター作り



懐かしい童謡や唱歌を歌いましょう



ヒノキをつかって工作

平成26年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂児童館 交流事業を終えて

名古屋市瑞穂児童館 稲澤真由美

名古屋女子大学との交流事業は、0歳から大人まで幅広い年代を対象とした、クオリティーの高い内容の講座やイベントとして、児童館の多くの利用者に求められる素晴らしい事業だと実感しております。

年々、需要が増えているものとしては、子育て支援につながる講座です。26年度はたくさんのお母さんやみなさんに講座の参加をしていただきました。交流事業をきっかけに、「子育ての輪を広げるきっかけになった」「息抜きができた」「少し安心しました」などのお声をよくいただいております。そのようなダイレクトなお声の他にも、それぞれの講座の根底には様々な深い専門性があり、その上に成り立つ体験は、親支援、子ども支援ができる子育ての先を見通した魅力あるものばかりです。そして、学生のみなさんの存在も、子育て支援の講座に欠かせない大きな役割を担っていると改めて思いました。

また、児童健全育成の角度からの交流事業では、子どもの知的好奇心を刺激する内容のものや、季節感や伝統行事に触れながら、「食」への興味、関心を高めることができるなど、生活のなかで活用できる講座、創造することの楽しさを味わえる講座がとても人気でした。日頃家庭では体験できない新鮮な経験に、真剣に取り組む

子どもたちの姿が思いだされます。

そして、親子で一緒に体験できる毎年恒例のクリスマスイベント。26年度は200名以上の参加があり、とても盛況でした。クリスマスならではの内容の出し物を楽しんでもらうことができるなかで、学生のみなさんが発信する子どもへの優しいまなざしや、ご家族の方への丁寧な気遣いに、温かさをたくさん感じました。核家族が多い昨今、子どもや子育てを取り巻く環境は昔前と比べると、人と人のつながりが乏しくなっているともいわれています。できるだけ多くの人とのコミュニケーションを必要とされている今だからこそ、子どもが家族以外の人と関わる機会を、意図的に提供する場が求められる時代なのかもしれません。このような支援も、まさにこの交流事業を通して実践できているのではと感じております。

子どもの育ちとして、よいとされる価値も時代の流れとともに変わっていきますが、子どもにとって、普遍的な価値を見失わずに、これからも多角的な地域貢献が可能な名古屋女子大学と瑞穂児童館の交流事業を推進していき、子どもに関わるすべての世代に向けた地域活性につながることを願います。



食育相談



マザリーズ教室



木のおもちゃで科学体験



クリスマスを楽しみましょう

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究⑦」

～学生が主体的に学修する力を身につけるための教育方法の開発～

遠山佳治代・歌川光一・渋谷寿・嶋口裕基・白井靖敏・杉原大樹・辻和良・野内友規・服部幹雄・羽澄直子・原田妙子・吉川直志

平成27年度～平成29年度の本機関研究では、中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」の中の「主体的な学修を確立」させることを主眼に置いています。但し、本学では国家資格・免許等を取得させる目的で教育課程が構築されている学科（家政学部食物栄養学科、文学部児童教育学科、短期大学部保育学科）と、学生自らが学びたい専門分野を選択して学ぶ教育課程で構築されている学科（家政学部生活環境学科・家政経済学科、短期大学部生活学科）の二系統があります。そこで、各学士課程教育の中で、学生の主体的な学修のために、いかなる教材・教育方法等が適しているのかを検討することが急務となっています。

まだ本研究はスタートしたばかりですが、今後教員および学生へのアンケート調査を実施し、主体的な学習に関する実情を把握し、ベネッセコーポレーション「大学の学習・生活実態調査」と比較検討していくことを計画しております。また、学生へのインタビュー調査という手法を導入して、主体的な学びを意識した学生にあったティーチングスタイルを検討していくことを考えています。このように様々な視点より、本学における学生の「主体的な学修」を具体的に捉え、教員としてどのように学生の主体的に考える力を育成できるかを総合的に検討していきたいと考えております。

（文責：遠山佳治）

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～大正から戦前期の女子教育の諸相～

吉田文代・歌川光一・児玉珠美・嶋口裕基・竹尾利夫・遠山佳治・藤巻裕昌・宮本桃英・吉川直志

平成17年に始まった本機関研究は、平成25年度で五期目となり、本年度は今期最終年度の3年目です。4月より新たに研究メンバーとして2人の先生方をお迎えすることができました。その結果総勢9名のメンバーで研究に取り組んでいます。これまでの研究目標である越原春子先生の建学の精神、教育理念、そして女子教育についての研究は、機関研究論文の執筆に向けてさらに邁進していきたいと考えています。

本年度の研究テーマは、これまでの研究に引き続き「大正から戦前期の女子教育の諸相」としました。

この2年間、メンバー全体の共同研究として本学園の元職員、

卒業生に対するインタビューを実施いたしました。さらに本年度は、名古屋高等女学校の当時の学校生活の様子、そしてそこから読み取ることができる諸相を明らかにするために名古屋高等女学校時代の同窓会『會誌』より「学校日誌」をメンバー全員で分担して読みとき、記録化していく予定です。

個人研究では、これまでと同様、メンバーの専門分野を尊重しながら、春子先生に関する事項もしくは『會誌』を基礎として、各専門分野の関連事象について研究を深め、まとめ上げていきます。そして、本年度は最終的な報告書作成に向けて論文の執筆を開始しました。

（文責：吉田文）

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～豊かな言葉の獲得Ⅱ～

幼児保育研究グループ

今年度は、昨年に引き続き、研究主題を「豊かな言葉の獲得」とし、豊かな心を持った豊かな言葉が出る子供たちを育てるという目的の基に研究を進めることにしました。特に、学年ごと、園全体としての実践を進めることにより、学年の違いに着目した研究になるようにと計画しています。

研究の進め方として、①音楽・絵画表現の活動を通じて明らかにすること ②年齢別に言語活動を比較検討し、その違いを明らかにすること ③以前行った研究と比較し、社会の変化に対応した保育のあり方を探ることの3つの視点を設定しました。そして、各学年の発達段階を踏まえた言葉の獲得プロセスと援助のあり方を明らかにしたいと考えています。

具体的には、3学年共通のなじみのない曲及び各学年の発達段階に合った曲を選び、歌う前と歌い込んだ後に描いた歌詞のイメージの絵を比較検討することで、絵の変化及び子供の言葉の獲得の関連を探っていきます。また、先行研究と同じ手法で、紙芝居の1場面を掲示し、発せられる言葉を学年ごとに比較検討します。

こうした実践を進めることにより、言葉の獲得のために必要な援助のあり方を明らかにしていきます。(文責：森岡とき子)



絵本の世界を楽しむ子供たち

プロジェクト研究

「教員養成校における創造的思索構築のための教育カリキュラム検討Ⅱ」

～芸術・教育哲学の観点から～

嶋口裕基・堀 祥子代

平成25年度のプロジェクト研究に引き続き、本年度は芸術と教育原理の観点から、教員養成校を卒業した学生が主体的かつ創造的に自分の頭で考え、自身の内側から出る確かな言葉で人の心に寄り添いながら、子どもや保護者および地域住民とかかわりを持つことのできる保育者及び小学校教員の育成を目指す教育カリキュラムの開発と提案および有効性を検証していきます。

今年度の研究に先立ち、春休み中に研究メンバーのゼミ所属学生が合同で、子どもの遊びにみる学びとは何かをテーマに、親子を対象とした講座の企画の提案から運営までを行いました。そこで繰り

広げられた参加者である子どものつぶやき、およびその保護者との対話から、異年齢で構成されるグループ内での活動に期待される「足場かけ」について、また、遊びを通して「表現すること」とは何かを体験する貴重な機会となりました。

今後も学生が子どもの創造活動に触れる活動や美術館等での芸術鑑賞活動などを通して、学生が自らの言葉を用いてお互いに思考を深めることを目的とした語りの要素の広がりを期待しています。同時に、学生の行動や学生同士の対話における語り、アンケートや写真動画記録などを質的データとして分析していきます。(文責：堀 祥子)

プロジェクト研究

「乳児接触における学生のマザリーズの学習効果に関する研究」

神崎奈奈・児玉珠美代・吉田 文

マザリーズとはIDS (Infant-directed-speech) とも呼ばれ、乳幼児に対して自然に出てくる語りかけ方のことです。乳幼児にとっては非常に重要なマザリーズですが、ここ数年、マザリーズを自然に表出することが困難な母親や保育者が少しずつですが、増加傾向にあることがわかっています。こうした状況に対し、保育者養成校学生を対象とした、乳児接触におけるマザリーズに対する意識変化やマザリーズ学習効果を明らかにすることを目的とするプロジェクト研究活動を進めさせていただいております。

本年度4月に短期大学部保育学科の新入生全員を対象に、マザ

リーズスキルの実態調査を実施し、その後、瑞穂児童館のご協力をいただき、3回のマザリーズ教室に参加する学生の乳児に対する語りかけの音声分析を通して、マザリーズスキルの変化を調査して参りました。今後は調査結果の検証とまとめに取り組んで参ります。本研究は平成27年度の1年間プロジェクトとなりますが、乳児接触における保育養成校学生のマザリーズの学習効果を明らかにし、将来的には保育者養成校の学習プログラムとしての提案をめざしていきたいと考えております。

(文責：児玉珠美)

プロジェクト研究

「子どもの主体性を尊重した保育実践の研究」

吉村智恵子代・荒川志津代・小泉敦子・安田華子・宮原亜沙子・磯村純美

保育制度の変化、保育環境の多様性に対応できる保育者が求められる近年、保育者養成を担う私たちは、保育実践を深く吟味した研究による指導内容で学生の保育者としての専門性を高めていくことも必要です。

本研究では、「子どもの主体性を尊重した保育」に着目して保育実践現場から情報を収集し、学生へ伝える形としていくことを目的としています。「主体性を尊重した保育」あるいは「自由保育」と呼ばれる保育形態は、ことばとしては受け入れられていますが、保育の実際においてはその質において課題を抱えているともいえます。「主体性の尊重」とはどのようなものであるのか、その問題点

を明らかにし、抽象的なことばで語られる内容の実質を明らかにしたいと考えています。

初年次である今年度は、「保育実践研究のあり方」や「主体性概念」に関する先行研究の概観、乳児期に特化した「主体性を尊重した保育」の研究を進めています。現在は、乳児保育を担当する初任保育者が記述した保育エピソード、乳児のもう一つの生活の場である家庭で母親が記述した育児エピソードを収集しています。それぞれのエピソードを分析し、乳児と保育者、養育者の主体性について捉える起点としたいと考えています。

(文責：吉村智恵子)

平成27年度地域貢献事業計画

名古屋市瑞穂児童館及び瑞穂保健所と本研究所とで展開しているコラボレーション事業「開かれた地域貢献事業」は、毎年好評をいただいております。今年度も学内公募で参画を先生方へお願いし、多くの先生に応募していただき、充実した企画が採択されました。

名古屋市瑞穂児童館との交流事業は、平成27年8月から28年3月までに、11の講座を開催し、12月の児童館クリスマスイベントとして5つの楽しい企画を行います。

名古屋市瑞穂保健所との交流事業は、平成27年9月から28年2

月にかけて、65歳以上を対象とした「若返り教室きらきらコース（平成27年度認知症・うつ予防教室）」を支援する形で、5つの企画を行います。

これらは、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部保育学科・生活学科の教員と学生、名古屋女子大学同窓会「春光会」および総合科学研究所教職員が協力して実施いたします。今年度も、より充実した地域貢献を推進・発展させてまいります。

(文責：原田妙子)

瑞穂保健所共催講座 開催場所 ● 名古屋女子大学

平成27年度認知症・うつ予防教室「若返り教室キラキラコース」

第1回 9月14日(月) 「医師による講和と相談」

第2回 10月19日(月) 「オリジナルシャツを作ろう！」

第3回 11月 9日(月) 「懐かしい童謡や唱歌を歌おう！」

第4回 12月10日(木) 「声の出し方を変えるだけで、伝わる声に！」

第5回 1月 7日(木) 「ハイジの白パンを作ろう！」

第6回 2月 8日(月) 「香りの良いヒノキを使って作品を作ろう！」

瑞穂児童館共催講座 開催場所 ● 瑞穂児童館／第5回、第9回は名古屋女子大学

第1回 8月27日(木) 「親のメンタルヘルスについて考える一育児期のイライラと付き合いには一」

第2回 10月 4日(日) 「乳幼児対象食育相談」

第3回 10月30日(金) 「親子で楽しむ音楽遊び～はじめの一步～」

第4回 10月31日(土) 「親子で楽しむ音楽遊び」

第5回 11月21日(土) 「ハイジの白パン作り」

第6回 12月20日(日) 「絵本の中の「衣食住」の世界を楽しもう
～「ペレのあたらしいふく」から～

第7回 1月 9日(土) 「懐かしい歌・心に響く歌」

第8回 1月30日(土) 「木のおもちゃをつくって科学体験」

第9回 2月27日(土) 「ひなまつりのお菓子作り（おこしもの作り）」

第10回 3月 1日(火) 「子育て教室一保護者の交流と幼児のあそびについて」

第11回 3月12日(土) 「空気を実感する科学実験」

クリスマスイベント

開催場所 ● 12/12は名古屋女子大学／12/13は瑞穂児童館

12月12日(土) クリスマスのオーナメントクッキー作り

12月13日(日) 「みんなでクリスマスを楽しみましょう」

「みんなでクリスマスパーティー」

「クリスマスのペーパークラフトをつくろう！」

「たのしいやじるべえ作り」

講演会のお知らせ

日時 平成28年2月26日(金) 10:00～12:00 場所 学校法人越原学園 越原記念館ホール

今年度の講演会の日時が決定いたしましたので、お知らせいたします。詳細は決定次第、ご案内申し上げます。どうぞご期待ください。

今年度運営委員

委員長

原田 妙子
HARADA Taeko
(短期大学部)

伊藤 充子
ITO Mitsuko
(文学部)

羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)

間宮 貴代子
MAMIYA Kiyoko
(家政学部)

森屋 裕治
MORIYA Yuji
(短期大学部)

研究所メンバー

所長

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

教授

越原 一郎
KOSHIHARA Ichiro

職員

寺島 まり子
TERASHIMA Mariko

編集後記

ここに総合科学研究所だより第21号をお届けいたします。研究は、これまでの研究を基にして積み上げられていきます。この研究所での研究も、これまでの事業や研究活動があつてこそ次の新しい研究へと続いていきます。本号は総合科学研究所が行っている事業や研究が着実に次へのステップに進んでいることを伝えるものとなりました。ご執筆頂きました関係者の皆様には感謝申し上げます。地域貢献事業では多くの先生方に参加頂き、さらに本年度の事業にも研究所の活気が引き継がれていきます。学園創立100周年を迎え、研究所の事業や研究もその歴史を基盤として未来へ続く研究活動となっていきます。今後とも、総合科学研究所の活動にご期待頂き、ご協力をお願いいたします。(文責：吉川直志)